



志度高だより 一飛翔の窓

第103号
(H22.7.16)

「もう一つの夏」

県営球場へ向かうため高松市内を走行していた。薄曇りの蒸し暑い日だったが、昨夜の雨で濡れた街路樹の緑は洗い立てのシャツのように涼しげだ。信号が赤になった。ブレーキを踏む。けだるい空気にブレーキのききも悪い。停止線を少し越えて止まった。フロントガラスの向こうに球場が見えた。プラカードに先導されて行進する選手たち。手を大きく振り、まっすぐ前を見据えて歩く姿は、湿った気持ちをパリッとさせる。あと1時間もすれば高校野球の開会式が始まる。

信号を待っていると、自転車に崩れるほど荷物を積んだ行商の老女がやってきた。それも二人。頬かむりしたタオルから覗く顔は太陽に焼かれ赤黒い。ゴム製の前掛けと白い長靴。発砲スチロールの箱の中は魚に違いない。古い秤の真鍮の皿が鈍い光を放った。鱗の光だ。

歩行者用信号が点滅を始めた。老女はペダルを踏み込んだ。ペダルが半分回転した。ところが老女は足をペダルから外すと、その足を同じペダルに載せぐいと踏み込んだ。だが荷物が重く、自転車は思うように前に進まない。ペダルを半分ずつこぐ。老女はこれを繰り返した。私はこの動作を不思議に思ったが、はっと思い当たった。老女は右足が不自由でペダルを1回転させることができないのだ。半回転ずつ前を急ぐ老女をせかすように、信号は点滅を繰り返し、やがて赤に変わった。前の老女は何とか横断歩道を渡り切ったが、後ろの老女はまだ道の中ほどで悪戦苦闘していた。右車線にいた私のちょうど前だ。彼女が視線をずらせてこっちを見た。老女が焦っているのが分かる。私の後ろにはすでに数台の車が並んでいる。左隣の車線も同様で、車が数珠つなぎだ。サドルから腰を浮かし、半回転ずつペダルを踏み続ける老女。胸の奥に杭が打たれた一瞬だった。



あれも夏のことだった。空は真っ青で、染み一つなかった。照りつける太陽が容赦なく首と肩を焦がした。池で魚釣りをしていた私は、釣り道具を納屋に置き行っただ。そのとき自転車のベルが鳴った。「おるかい？」魚屋のおっちゃんの声だ。父が土間から玄関に出た。私も外に飛び出した。魚屋のおっちゃんは私の顔を見ると、いつものように魚の入った木箱を開け、「ほれ」と氷をくれた。私は氷を水で洗って口に含んだ。刺のような冷たさが歯にしみた。

「一匹売れんのか」「そうか」箱の中には鯖のような魚が一本氷に埋もれ横たわっていた。解けた氷の水が乾いた地面を濡らした。「もっといるか？ どうせ捨てるんじゃ」おっちゃんは一番大きな氷を掬うと、赤銅色の手で私に差し出した。私は、うん、と言って受け取った。



「頼めんかいな」「分かった」父はそう言うと家の中に消えた。しばらくしてビニール袋を提げて戻ってきた。「これ」父はビニール袋を魚屋のおっちゃんに渡した。おっちゃんは引き替えに魚を父に渡した。「いつも助かるわ」魚屋のおっちゃんはそう言い残して自転車にまたがった。おっちゃんの黄ばんだ麦わら帽子が陽炎の中に消えていった。父は米2升渡し、魚を一匹受け取った。その当時、生活するというのがどういうことか、子どもの私には分からなかった。

運転中も二人の老女の姿が脳裏から離れなかった。人は死ぬまで労働を厭うことがあってはならない。なのに日頃仕事のことで文句を言う自分が、なんとなくちっぽけに思えた。仕事で人は成長する。発砲スチロールの中の魚がさばけなかったら、あの老女二人はどうするんだろう。今頃、米2升と物々交換なんてあり得ない。自転車のペダルが踏めなくなっても仕事か。魚屋のおっちゃんもあの夏の日から数年して死んだと聞いた。

緑の芝生を横切り、スパイクで黒土を跳ね上げて選手が入場する。彼らは開会式を終えると、今度は白球を追って球場を走り回る。きっと青春を謳歌することだろう。そして観客席の多くの人が、高校球児の澁刺としたプレイに感動するに違いない。

でも、私の脳裏には彼らの躍動する姿ではなく、渾身の力でペダルを踏む老女二人の姿があった。多分、君たちは知らないだろう。もう一つの夏があることを。